

大学講義で若狭町「探究」

立命大 町民、職員が毎週講師



レポート参考 活性化探る

立命館大(京都府)と学術交流協定を結ぶ若狭町は、町が取り組むまちづくり事業や町が抱える課題に関する講義を同大で行っている。町民や町職員らが4月から7月まで毎週交代で講師を務め、全15回の講義を展開。町のPRを図るとともに、学生にまちづくりの意見を求め今後の活動のヒントにつなぐ。

(藤田有美)

同町と同大は、町村合併後の2005年度、地域振興や教育の発展を目的に学術交流協定を締結。これまでに、同町は同大経営学部や政策科学部に町おこしなどの研究の場を提供。学生たちは同町熊川で空き家活用調査をしたり、同町役場などで研修生として就業体験を行ったりしている。今回の講義は、都市部

立命館大の学生に若狭町熊川のまちづくりについて講義する宮本会長。23日、京都府の同大

の若者の同町の認知度を高め交流人口の拡大を図るとともに、毎回の講義後に提出する学生の斬新な発想や意見、まちづくりに関するレポートを参考にしようとの狙いがある。対象は経営学部の学生で単位を取得できる。毎週水曜、90分の講義に約400人が受講登録し、毎回約350人が受講している。

23日の7回目の講義では、若狭熊川町まちづくり特別委員会の宮本哲男会長(65)が登壇した。同町熊川宿で23年前に同委員会を発足して以来、住民らで取り組んできた景観整備や空き家活用プロジェクトなどを紹介した。

宮本会長はまちづくりには人材の育成が重要と講義。06年から住民で企画運営する秋のイベント「熊川いっぶく時代村」

は、「町に人を呼び込みたい」と話している。

町によると、これまでのレポートで多いのはSNSでの情報発信と公共交通機関の充実を図るといった案。町の担当者は「町の公式SNSは現在無いので、学生の意見を参考に導入の是非を検討していきたい」と話している。